

(1) 市長あいさつ

皆さんこんにちは。北九州市長の武内和久でございます。今日は日曜日にもかかわらず、ミライ・トークにこんなに多くの方にお越しいただきありがとうございます。

私も今、若戸大橋や風車などを見てきましたが、若松は非常にスケールが大きい。色んな大きいものがある、橋も大きいですし、ひびきのも大きいですし、この旧古河鉱業若松ビルのような素晴らしい大きなスケールの歴史を持っている。本当に色々な魅力が埋まっている場所です。

昨年か一昨年に、前の前の市長の末吉さんに会いに行ったときに、武内、これからどこが北九州の中心になると思うか、と話があった時に、末吉さんは、これからは若松やぞ。若松がこれから変わっていくや、ということで、これは末吉さんの1つの見方ですが、非常にポテンシャル、色々な可能性が埋まっているということで、私も着任以来色々なチャレンジを試みているところでございます。

第1回では、食の魅力やさまざまなまちのつながりの魅力など、色んなことをお話しさせていただきました。今日はさらにスケールを大きくして、これから20年後、30年後どういうまちを目指していくのか、若松のベクトルをどちらに向けていくのか、そのような大きな話がさらにできることを期待したいと思います。パネリストの方も、今日はなんと史上初めて、パネリストのうち半分が高校生という、若い力で色んな提案をしていただく会にさせていただきたいと思います。

また今日は若松区役所の若手職員にもいろいろと工夫をしていただいて、企画していますので、明るく、そして前向きな時間になりますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

(2) パネルディスカッション

進行（沼田）：

それではただいまより、パネルディスカッションを始めて参りたいと思います。パネリストの皆様を順番にご紹介してまいります。

お一人目は、牛島 源さんです。一般社団法人わかまつみらい代表理事、株式会社WMサポート代表取締役、若松がんばろう会事業担当副会長、若松商店街連合会副会長を務めておられまして、若松商店街で惣菜店、就労系障害福祉サービスを経営する傍ら、若松がんばろう会や若松商店街連合会の役員として、地域活動を積極的に行っておられます。よろしくお願いいたします。

続きまして、石川 俊彦さんです。福栄工業株式会社代表取締役社長、若松あつまる会副会長、響灘臨海工業団地でプラント製缶・配管の製作・据付、メンテナンスなどを主業務とする中小企業の2代目社長でいらっしゃいます。若松あつまる会は令和4年に発足され、会員数90社で、会費の大半を若松区役所を通じて地域貢献活動に充ててくださっているということでございます。よろしくお願いいたします。

それから、先ほど市長からも本日は高校生がお二人参加とご紹介がありましたが、若松高等学校からお二人来ていただいております。お一人目が、大庭 優希菜さんです。若松高等学校の3年生で洞北中学校のご出身とのことです。もうひと方は、藤本 春紀さんです。若松高等学校の3年生で二島中学のご出身とのことです。

若松高校では、令和3年度から「若松学」という地域創生型学習を実施しているそうですが、本編を始める前に本編とも関係してまいりますので、「若松学」とはどのようなものなのか藤本さんからご紹介してもらいたいと思います。よろしくお願いいたします。

藤本氏：

若松学は、若松高校の私たち3年生の代から始めた地域創生学習で、8つの班に分かれてそれぞれ

れ過去、現在、未来について、それぞれの班の目的をもってやっていた活動になります。110周年記念でその活動の集大成を発表し、今後もその活動を続けていくものとなっています。

進行（沼田）：

ありがとうございます。少し緊張をしているかもしれませんが、控室で大変上手に話されていたので、これからどんどん調子が上がっていくと思います。皆さん温かく見守って応援していただければと思います。またパネルディスカッションには、奥野区長と武内市長にも加わっていただきますので、よろしくお願いいたします。

それではパネリストの皆さんからお話を伺っていきたくと思いますが、先に区長から何が区の課題で強みであるのか、パネルディスカッションの中で何が論点になっていくかについて、少しご紹介をいただければと思いますのでよろしくお願いいたします。

奥野区長：

若松区長の奥野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。先ほど、若手職員の方からプレゼンがありましたので、若干重なる部分も多いかと思いますが、少しお時間をいただいて説明をさせていただきたいと思います。

若松は大きく4つのエリアに分かれるのではないかなと思っています。それぞれのエリアでそれぞれの特徴がございます。まずはまさに今ここにある、旧古河鋳業ビルこの辺一帯ですが、先ほど説明がありましたように、石炭の積出港として非常に賑わった場所でございます。南海岸通りは、このビルも含めて上野ビルや歴史を物語るようなビルが大きく残っているという場所でございます。次に、石川さんがいらっしゃる響灘地区ですが、循環型社会を目指した北九州エコタウンをはじめとして、北九州における次世代エネルギーの拠点となっております。またご存じだと思いますが、日本最大級の広さを誇ります、響灘ビオトープもございます。様々な生き物が生息して生き物の命の循環を観察することができる場所でもございます。続いて少し場所を移して、西部方面です。先端科学技術の研究と交流を目的としまして、北九州学術研究都市というものがございます。先ほどありましたように、高齢化率が4%と非常に若者が多いまちでもあります。そして、マリレジャーが盛んな若松北海岸でございます。今はシーズンが終わってしまいましたが、市の花であるひまわりの名所があります。また先ほど説明がありました野菜、魚介類など食の産地でもあります。キャベツ、スイカ、トマトなどブランド商品も数多く出荷されている場所でございます。

このように魅力ある4つの地域がある中で、これらを生かしてさらに若松の魅力あるまちへとつなげていくためには、大きく4つのポイントがあるのではないかと思います。一つ目のポイントとしましては、若者の定着と多文化共働ということ。地域のコミュニティ維持のためにも特に若い世代が住みやすい、働きやすい環境のまちづくりを目指すことが必要なのではないだろうかと思います。響灘地区や学研都市には外国人の留学生が非常に多いですが、なかなかまだ地域交流というところまでは十分に行きつけていないと思っていますので、地域交流を生かして異文化の交流の場としていくことも必要なのではないかと思います。二つ目のポイントは、交通アクセスの向上でございます。行きたいけれど行けないという状況になっております。先ほども説明しました4つのエリアのうち、響灘エリアや若松北海岸エリアは利便性が高いとはなかなかいえぬ場所でございます。北海岸エリアにおいては駐車場などが課題として残っているのではないかと考えております。三つ目のポイントですが、エネルギー産業の集積化ということで、若松区の強みでもある、モノづくり、付加価値の高い産業の集積地として、さらなる発展や雇用の創出を合わせて、若い世代の就職支援を強化する必要があるのではないかと思います。皆さんご存じでしょうか。響灘地区にはいまどれくらいの企業が進出しているか、わかる方はいらっしゃいますか。100社以内だと思いますか。実は180の企業が来ています。当然ながら大企業も中小企業もあります。市も大企業の

誘致については非常に力を入れておりますが、やはり大企業を下支えするという方はおかしいんですが、そういう下支えをする中小企業の支援もとても大事なことなのだと思います。そして四つ目のポイントですが、観光振興と発信力の強化でございます。先ほども説明させていただきましたが、この辺一帯は非常に歴史を物語る施設がございます。ただ、なかなか十分に休憩できるようなカフェ、そのような場所がないというのが現状です。また先ほどもありましたが、北海岸エリアはやはり市街化調整区域、風致地区という規制もありますので、そのあたりの課題もクリアにしていかなければいけないと思います。あわせて、情報の発信については、現状は個別に情報発信がなされているのではないかと思います、やはりバラバラに発信してはなかなか大きな流れ、ウェブにはなっていないのではないかと思いますので、情報の集約化や情報の拠点なども作る必要性があるのではないかと考えております。

若松を魅力的なまちにするポイントについて少しお話させていただきましたが、今日は商店街からも牛島さんや響灘地区からは石川さん、また若松高校から大庭さん、藤本さんに来ていただいておりますので、ぜひとも皆さんの知っている強みや課題も含めて、よくなるポイントなど熱い思いをお聞かせいただきたいと思っております。どうぞ今日はよろしく願いいたします。

進行（沼田）：

奥野区長ありがとうございました。それでは、パネリストの皆さんにお話をお伺いしたいと思います。いま、区長から色々お示しいただいた、あるいは区の職員の方がお話しされた課題や強みの中から、特に重要だと思われることを、その理由と共に話していただきたいと思っております。困っているというお話もあるとは思いますが、課題解決に向けていろいろと取り組んでおられることがおありだということも伺っております、前向きな兆しもたくさんお伺いしておりますので、そのあたりも中心にお話しいただければと思います。ではまず、牛島さんからお願いいたします。

牛島氏：

牛島と申します。よろしく願いいたします。いま区長からもお話がありましたようにいろいろな強みと課題があると思いますが、私自身商店街の中で商いをさせていただいておりますので、その観点から見ていくと、観光振興とについては、この南海岸を活かした観光振興は非常に我々商店街で商売をやる上でも重要なのではないかと考えております。その中で、先ほど区長から休憩できるカフェなどが少ないということがありましたが、特にこの南海岸通り沿いは何軒かはありますが、やはり絶対数がまだ足りないのかなと思います。すぐ近くに商店街がございますが、そこまでの導線に関しても分かりにくいということがありますので、うまく南海岸の方とも連携を取っていかなくてはいけないと考えております。

また、どこの地域の商店街もそうなんですが、やはりシャッターが閉まっているところが多いという部分がございます。ただ、我々もそのシャッターを一つでも開けるための活動も6年ぐらい前から続けていまして、少しずつですが閉まっていたシャッターが開いていっている現状もございます。我々は商店街の中でもそのような活動をしながら、南海岸の観光なども含めて考えていきたいなと思っております。

進行（沼田）：

ありがとうございます。商店街の空き店舗を少しずつ減らすための取組もされているということで、実際になかなか時々見て回るだけでは分からないところもあるかもしれないですが、具体的にどのように減っているのか、減らすためにどのような活動をされているのか、また今後空き店舗を減らしていくためにやらなくてはいけないことなど、何か思っていることはありますか。

牛島氏：

空き店舗は確かにあるのですが、使える店舗がちょっとずつ減っている現状があります。なぜかと言いますと、やはり建物の老朽化だったり、地権者の方が複数人いらっしゃるというような、非常に複雑な問題もございます。ただ、それこそ昨日やったところなのですが、商店街の空き店舗ツアーを我々がいま企画してやらせていただいております。昨日も若い方から少しご年配の方まで約 10 名ほど参加いただきまして、今ご案内できる空き店舗はどこで、どんな業種にそれぞれ向いているのか、こんな使い方はどうかという提案までやらせていただいております。その取り組みの甲斐もありまして、ここ数年、新規出店、若い方の飲食業、カフェなどが非常に増えてきている状況です。

進行（沼田）：

ありがとうございます。そのようなツアーをすることで、何人かはやはり出店したいと手を挙げてくださる方が確かにいるということで、新しくできたお店を応援していくというのも、商店街を盛り上げていくためにも大事なのかなと思いますので、ぜひ地域の皆さんで盛り上げていただけたらと思います。

続いて、石川さんからお話を伺いたいと思います。よろしくお願いします。

石川氏：

私からは先ほどの若手職員のプレゼンの中から、エネルギー産業の集積化ということで、区長のお話にもあったように、モノづくりのまちで職人さんがたくさんいるところですので、元々新日鉄が近くにあり、だんだん時代が移るにつれて、リサイクル事業だったり、最近では物流、エネルギーの方へ移ってきています。我々、零細企業、中小企業の立場からすると 30 年、25 年前までは進出企業が来ると新しいお客さんが来る喜び、ありがたいという気持ちだけでした。しかしながら、雇用という観点で見たときに、現在では、強力なライバルがたくさん出て来て、我々は日本人の若い子は雇えない状況にありまして、現在、私の会社では若い子はほとんど外国人の技能実習生、特定技能生です。そのような問題点と昨年、区の若松未来をつくる検討会議に出席させていただいた際に、PTA の母の会の方から若松の高校生は若松に就職を希望しているけれど、就職するところが分からないという意見を聞きまして、私は少し目から鱗でした。我々は雇えないと思いこんでいるのですが、高校生で就職を希望の方は区内に残りたい方もたくさんいるという話を聞きました。そこで若松あつまる会で、商流に則った高校生の工業団地バスツアーというものを企画しました。これは、我々は B to B の仕事で顧客が企業なので、一般の人となかなか関わりがない仕事ですので、どういった仕事をしているのか分からないというのが我々中小企業の仕事です。我々のお客様が団地内にいらっしゃいまして、その中で私の会社のお客様で世界的なチタンメーカーがあるのですが、そちらに工場見学に行ってください、その次に私の会社に来ていただいてチタンを作っているプラント設備のタンクや配管などが我が社で作られていますよと、そしてその材料も同じ団地の違う会社から買っていますよという流れで、商流に乗せて高校生にツアーしていただきました。自分にあった仕事はあると思います。自分も親ですので、自分の子どもに対してはどうしても、大きい会社と小さい会社があれば、できるだけ大きな会社に勤めてもらいたいという気持ちはあると思いますが、例えば私の会社ですと、手先が器用で絵が上手だったり、モノを作るのが好きな方は向いていると思います。そういったこと就職に対してのミスマッチをできるだけなくせるように、仕事の工場の中でも色々な職種がありますので、どんな職種に就くのが一番向いているのか、そのようなことを先ほどのツアーで勉強していただいて、直接的に就職に繋げていきたいという思いでいま活動しています。

進行（沼田）：

ありがとうございます。どうしてもモノづくりの中小企業というと、工業高校を出ておかないといけないのかと思ってしまいそうですが、必ずしもそうではないということですよ。

石川氏：

そうですね。私の父も職人から会社を立ち上げましたが、若松商業高校出身でしたし、社員の中でも工業高校出身者は 20%いかないくらいしか実はいないということですので、特にそういうことにもこだわる必要がないと思っています。

進行（沼田）：

ありがとうございます。区長から異文化交流という話も先ほどありましたが、石川さんのところにもたくさん、インドネシアやベトナムの方が働いておられるということですが、どのような感じで接しておられるか、色々ネガティブなニュースが流れることも多いですが、そのあたりはいかがでしょうか。

石川氏：

皆さんがニュースで目にされる時は、奴隷制度に近いものなのではないか、外国人を労働力とだけ考えているのではないかとよく言われていますが、弊社で勤めているベトナム人の子たちは、技能実習生が3年、2号が2年、それから特定技能へ上がるということで、5年、8年、10年と働けるのですが、8年以上働いている子たちが非常に多くいます。外国人の安価な労働力だからと、ずっと最低賃金のまま期間の3年だけ使えばいいという企業さんが特にマスコミの目に留まるんですが、本当に我々みたいに人材が不足している会社は外国人とか日本人とか関係なくしっかり技術を教えて、技術が上がっている子には昇給をして、そういった付き合い方をすれば長く働いていただけるのではないかとと思っています。

進行（沼田）：

ありがとうございます。分け隔てなく、普通に接すれば成長してくれて、会社にとっても大切な戦力となるということなのかなと思います。それでは、若松高校の二人にもお聞きしたいと思います。まずは大庭さんから、最初のテーマについてお話をお願いします。

大庭氏：

若松区は高校生や観光に来た人たちには、電車やバスがあるのですが、街中を回るとなった時には徒歩しかないと思っています。高校生や観光の人たちがもっと観光しやすくするために、レンタサイクルを設置したらいいのではないかと思います。ただ単に、自転車を置くだけでは近くを回ろうかなとは思いますが、遠くまではいかないと思うので、レンタサイクルを通して市が行事などを実施したりして、魅力ある三日月屋や上野海運ビルなどがあるので、そちらに簡単に立ち寄ってもらいやすくなるので、レンタサイクルを設置してはどうかと思います。

進行（沼田）：

ありがとうございます。もしレンタサイクルができれば、どんな風に回ってもらったら楽しそうだなとイメージされていることはありますか。

大庭氏：

レンタサイクルを設置することで、自分からは少し離れた友達とも一緒に若松区の色々なところを回ることができますし、南海岸はこのあたりに近いですが、北海岸の脇田の海などの方にも行きやすくなるので、徒歩では絶対に行かないけれど、自転車なら行ってみようかなと好奇心を持てるようになるのではと思います。

進行（沼田）：

ありがとうございます。行ってみたいところへ回れるようにというお話でした。続いて、藤本さんからもお話を伺いたいと思います。

藤本氏：

自分は SNS などを通しての発信力が若松区にはまだまだ足りないと思っています。いろいろ観光するところや食べ物屋さんなどたくさんあったとしても、それが若松区民の目にしつかつかないとしてもお客さんは減ってしまうと思います。そこで区や市の SNS だけではなく、企業ごとの SNS などを通してお客さんを増やしていくことができればもっと人が集まっていくんじゃないかと思っています。

進行（沼田）：

ありがとうございます。いま SNS という言葉がでましたが、具体的にどんな発信をすればいいと思われませんか。

藤本氏：

YouTube が一番出しやすいと思うのですが、YouTube は検索して動画自体に興味をもって再生を押さなければ流れてこないことが多いので、それではあまり集客には役立たないと思っています。最近では TikTok、YouTube のショート、インスタのリールなど押さなくても勝手に流れてくるような動画コンテンツが増えている中で、どうしても目に付く、避けられないという状況があるので、そこに力を入れていくことで、自分が見たいと思わなくても勝手に情報が得られるようなシステムを活用して、より多くのお客さんを集客できるのではと思っています。

進行（沼田）：

ありがとうございます。情報発信という話がでしたが、石川さんは若い頃に情報発信をやられたことがあると先ほどお聞きしたので、ご紹介いただければと思います。

石川氏：

私は 30 代の時に北九州青年会議所で活動させてもらっていました。北九州ふるさとかるたをご存じの方いらっしゃいますでしょうか。先ほど高校生の方はご存じでした。それは私が青年会議所時代に立ち上げた事業で、一番初めは、恋文俳句、北九州を愛する俳句を書きましょう、という事業にしました。季語の代わりに北九州にまつわる言葉を入れて五七五で書いて応募してもらって、それが非常にヒットしまして、次の年に賑わいづくり課の方が少し発信がしにくいのでということで、今後はかるたの 50 音で募集をしましょうということで、形になったのが今の北九州ふるさとかるたです。当時、はがきに手書きでかかれたものが、たった 2 週間で約 3 千句集まりました。ということは、いま皆さんがおっしゃったような、写真を撮ってインスタにあげてとかいうことならば、その 10 倍、20 倍が恐らくすぐ集まると思います。行政の発信というのはやっぱり限られているかと思うので、行政の方たちは発信してもらおう仕組みを作って、私は

その当時、小倉牛の人に協賛をもらいに行ったり、地のもので全て協賛で商品にしたので、例えば第 1 回目に出ておられた、若松のトウモロコシの松浦ファームさん等と連携して、何かそういうものを発信すればいいのかなと思います。古い話で申し訳ないですが。

進行（沼田）：

20 年前に手がけられた発信の話が、そのころにはまだ生まれていなかった高校生の二人も知っているぐらい定着しているということもありますし、それからもっと情報発信がいろんな方がしやすくなっているという時代でもあるので、ちょっと工夫をするだけでどんどん知られるようになってくるかと思うので、若い力のアイデアと、かつての成功体験もうまく組み合わせていくと、上手い形で発信がこれから進んでいくかもしれない、そんなこともできるのかなと想像が膨らんだところでございます。

一通り一巡しましたので、今お話しいただいたことや他の方がお話しいただいたことも踏まえて、ご自身が考える区の将来像について、半年、1 年後というよりは 10 年くらい先をイメージして、どんな若松区になっていけばいいのか、お話しただけたらと思います。それでは牛島さんから順番にお願いいたします。

牛島氏：

先ほど、空き店舗がだいぶ埋まってきたことや、一方で老朽化して使えない空き店舗もあることについてお話しましたが、やはり商店街のお話をさせていただくと、その使えない空き店舗をいかに解消していくのかと、商店街自体がいま点在しているので、それをよりコンパクトに縮めたいと思っています。なぜかと言うと、ご年配のお客さまも多いですし、距離があると歩くのも大変で利便性も低いわけです。ただ、点々とあるお店が残っているということは強いお店なんです。そのお店は集積しなくても集客できている強いお店なので、その強いお店がもっとコンパクトに一つの場所、同じ通りに持ってこられると、利便性も高く、商店街としての生き残る道がそこにはあるのではないかと考えております。

それと南海岸、観光といかに商店街が連携していくのか。実際のところ、この通りにもっとお店が欲しいですよ。ただ、若干場所がないというか、税務署や行政が持つ土地、建物がありますし、すぐ近くに取り壊し途中の建物もありましたが、元々行政が持っている土地です。行政が持っている土地なので売却などをお考えになるのだらうと思いますが、もっとお店を増やしたいという部分でいうと、そういうのもうまく活用して店舗誘致することができないかなと考えております。

進行（沼田）：

ありがとうございます。先ほどお話にあったように、空き店舗は寂れた空き店舗になっているだけではなく、出店を希望する方もいて、その中でも残っている強いお店も確かにあって、ただどうしても離れていると利便性が悪いということ。私も今日若松駅から歩いて汗みどろになってここまできましたが、そんな時にお茶でも飲んで休憩できるお店なども含めて、コンパクトに集まっていると、色々選ぶこともできる。お店を出したい方がお店を出せて、同じ通りに集積をして、南海岸など観光資産とうまく連動した形になればいいというイメージでしょうか。ありがとうございます。つづいて、石川さんからお願いいたします。

石川氏：

先ほど強みの話でも申し上げましたが、モノづくりのまちというのがいまの強みですが、我々、中小零細企業の職人がいなくなったら、下支えするいま強みと言っているものがなくなっていくという危機感を一番持っています。先ほどお話しした商流ツアーで、勉強したり体験していただくということで、今回は高校生を対象にやりましたが、例えば、第二新卒の人や若者ワークプラザの方を対象に、また業界からなるべく人を逃さないという意味でも、お客様クラスの大きな企業からちょっと合わないということで退職した人材

をもう一回この業界に回遊させるように、先ほどの手法で対象者を少し変えてでもやっていって、自分に向いた職業とは何なのだろうといところまで、しっかりと事業を発展していきたいと考えています。

第 1 回目で高校生に来ていただいて、色々な方からうまくいきましたか、よくできましたかと聞かれるのですが、今回は高校 2 年生が対象でしたので、来年、ツアーに参加してうちの会社に来てくれた子たちの中から一人でも二人でも面接に来てくれて初めて、事業が成功だったかどうかわかります、と答えるようにしています。どうしてもイベントごとをすると、その時の盛り上がりであったり、実際に高校生も楽しんでくれていたので、それなりの充実感を私も得ていますが、実際は雇用の為にやっていますので、来年参加した人たちが、ぜひ来てくれるかどうか。また、我々もやはり雇用環境を整えたり、給与を上げたり、福利厚生を大企業に少しずつ近づける努力が必要だと思っています。また、私の友人が、とろろビーチにトゥモローコーストというグランピング施設を立ち上げて、その友人から石川さんの会社で焚き火台を作ってくれないかと言われました。スノーピークとかキャンプ道具のメーカーに依頼するとすごく高いそうで、地元の鉄工所に頼みたいと言ってくれました。そういった遊びや趣味と我々の仕事が多少でもつながって、例えばキャンプ好きな人が若松に住んで、職人の世界に入ろうとか、第 1 回目で藤村さんが、割烹からライダースカフェに変えられたと話されていましたが、バイク好きな人がうちの会社に来てマフラーの修繕ぐらいはできるとか。趣味と私の会社に来た技術が結びついて、この土地に住み着きたくなくて、休みの日もバイクに乗ったり、キャンプへ行ったり、サーフィンをしたりなど、そういった結びつきで雇用までつなげていくような、そういった将来のまちづくりが出来ればと願っています。

進行（沼田）：

ありがとうございます。大変ユニークといえますか、ただ単にグランピングはグランピング、工場地帯は工場ということだけではなくて、お互いにそれが近くにあることで、いま通ってきたあの工場で作ったものが見えるような、そんな形になればいいかなというイメージでしょうか。また商店街を盛り上げるという観点からすると、モノづくりの街とつなげるということですね。

この後、高校生のお二人にもお話をお聞きするのですが、それに関連して、牛島さんや石川さんからお話があった中で、若松学の中で企業探訪という冊子を若松高校から出しておられて、一冊一冊すごく調べられていろいろな企業の魅力や働いていらっしゃる方の生の声がかかれていて、ご自身やお仲間のお話でもいいのですが、これを作ってみて、区内の企業のこんなことに気付いたとか、もうちょっと早く知っておけば進路も別に考えたかもしれないなど、企業について調べられた時の気付きなどがありましたら、どちらでも結構ですので少しお話しただけですでしょうか。

藤本氏：

先ほどお話しした通り、若松学は 8 つの班に分かれていて、自分たちはそれぞれ企業の班には属していなかったのですが、自分たちには調べたときのことはわかりません。

進行（沼田）：

わかりました。今日は分かる人は来ていますか。

藤本氏：

和田先生がわかるのではないかと思います。

進行（沼田）：

それでは先生から説明をしていただきましょうか。突然振ってしまって申し訳ないのですが、この本は本当に面白いです。

和田氏：

若松高等学校で若松学を担当しております和田と申します。若松学はそれぞれエキスパートということで、8つの班の中から今回選抜して、再生可能エネルギーとリサイクル班から出ていますので、企業班については私から説明をさせていただきます。

企業班については、2年前にこの子たちが1年生の時から2年間をかけて、企業班は16名しかいないのですが、16名が4つの班に分かれて取材を行いまして、冊子の作成をしております。区内の100社の取材を行いまして、上下巻あるのですが冊子の作成をしております。冊子の作成の意図としては、いまのディスカッションの中にもありましたように、地元就職の機運を高めるところで、若松区内の小中学校、高等学校に冊子を配布しております。それ以外にも、地域の皆様にもご覧になっていただけるように若松図書館に何冊か寄贈もさせていただいております。とにかく地元で就職をしてもらいたい、という思いで作成をしている冊子になっています。

進行（沼田）：

もしよければ、生徒さんの反応や先生の感じられている範囲でお願いできたらと思います。

和田氏：

生徒については、企業班を選んだ子たちは就職希望の子たちで、うちが大体30名程度が毎年就職をしていくのですが、その中から生徒の声を聞くと、やはりなかなか地元の企業について知ることが高校生活を普通に送っていかないということで、こういう地域学習を進めていけば、地元の企業について深く知れたという高校生の意見を聞くことができました。

進行（沼田）：

お聞きになって石川さんはどう思われますか。

石川氏：

ありがたいんですが、実は弊社はその冊子に載っていないんです。ぜひうちにも来てください。

進行（沼田）：

ぜひ次の後輩たちは来てくれると思いますので、よろしく願います。それでは、本筋に戻って、若松高校のお2人からも区の将来像10年後こんなまちになっていたらいいなことについて、お考えをお聞かせいただけたらと思います。大庭さんから願います。

大庭氏：

先ほどお話ししたように、若松区は、今は交通が不便で行ける範囲が限られていますが、それがこの先10年後、20年後、レンタサイクルがもしできれば、まちを回りやすくなり、商店街が今新しく色んな企業を入れているのと同じようにお店などにも行きやすくなるので、また活気があふれて、もっとさらに使いやすくなっていくのではないかと考えています。

進行（沼田）：

使いやすくなる、いろんな所へ行きやすくなってもっといろんなお店を楽しめるようになる、そのようなことをイメージされているのかなと思いました。続いて、藤本さんからお願いします。

藤本氏：

自分はやはり、SNS という観点で、今後も発信を増やしていくべきだと考えています。先ほど行政ではなく、という話がありましたが、自分も同じような考えで、私たち高校生から高校生に発信する、大学生が大学生に発信するというのが、一番同世代に広がりやすい SNS の活用方法だと思っていて、インスタでハッシュタグ # を付けて募集をしたり、情報が広がれば他の県や区からいろんなところから人が増えていて、若者が、その SNS を見て増えた人が、企業に行って企業がまたそれで賑わいを取り戻していけたらとてもいいことだなと思っています。

進行（沼田）：

ありがとうございます。いま、賑わいと取り戻すという話がありましたが、先ほどこの本番の会議の前の打合せの時に、藤本さんから印象的なコメントをもらっていて、藤本さんから見ると、昔に比べてまちが明るくなったとおっしゃっていたんですが、そのあたりについてどの辺でそう思われたのかというのを教えてもらえますか。

藤本氏：

右のお二方（牛島さん、石川さん）からすると、若松区は前よりも暗くなった印象だと聞いたんですが、自分が小さい頃に来ていた時よりは街灯なども増えたのもあると思いますし、人が増えてお店も増えて、本当に幼い頃に来ていた時よりも雰囲気明るくなった感じがしています。そう感じたのは若松高校に来てからなので、3年前からしか分からないのですが、小さい頃に親に連れられて来ていたころよりは、若松ってこんなに明るかったっけ、と思うような場所が増えて、それはいいことだと思うし、今後ももっと明るくなっていけばいいなと思っています。

進行（沼田）：

ありがとうございます。会場の皆さんの反応がすごく大きかったのが印象的ですが、冒頭あった職員の方からの説明では、大きな流れで 50 年前に比べると人口が減っているというように見えるんですが、20 年にも満たない若い方から見れば、自分の幼い頃から比べて 10 年ですぐにぶん変わったようにも見える、上がり目に来ているというような、そのような見方もできるということで、10 年、20 年経ったときに、もっと明るいまちになっているかもしれないというような展望も広げられるのではないかと思います。ありがとうございます。

(3) 質疑

進行（沼田）：

それでは、先ほど休憩時間に会場の皆様からアンケートを回答いただきましたので、時間の都合上、すべてをご紹介するのは難しいと思いますが、中身を拝見しながらもう少し詳しく教えてほしい方に質問をさせていただきたいと思います。

まずは 20 代の方から「海も山も近く自然が豊かでアウトドアで遊びに行くにはもってこいの場所」であるいただきました。一方で「交通の便が悪い」という課題も書いていただきましたが、このように魅力ある

場所に来てもらうために、あるいはその魅力を感じて住んでもらうために、どんな風にしていけばいいか、思うことがあれば教えていただきたいと思います。この意見を書いてくださった方、コメントをいただけますでしょうか。

参加者 A :

いま、若松区で働いているのですが、学生時代は学研都市に通っていて、その頃の学研都市自体もバスが少なく諦めて自転車で通学していました。就職してからも響灘方面に通っているのですが、バスが朝夕 1 本ずつしかなく、あの辺にバスがないのは厳しいなということ、食事する場所についてもコンビニかお弁当を売りに来る車しかなくて、時間ずれてお昼を買いに行くと、食べるものが何も残っていない、ご飯を食べるところがないなど毎回思います。せっかく工場見学とかで来られる方も、もしかするとどこか食事する場所ないですかと聞かれる場合もあるかと思うんです。先ほどの説明で若松区には野菜など美味しいものがあるということだったので、そういったものを活かした食事をする場所、お店というと店舗を作らなくてはいけないとかハードルがあがるので、せめてキッチンカーとかを誘致してみるのもいいのではないかとすごく思っております。

進行（沼田） :

ありがとうございます。コメントに書いてくださった、海も山も近く自然が豊かでアウトドアに遊びに行くのもってこいというのは、実際にご自身も楽しんでおられるということでしょうか。

参加者 A :

はい。グリーンパークにも行きますし、高塔山にも、カメラは持っていませんが、写真を撮ることが趣味なのでアジサイを撮りに行ったり、あとは海岸の方にも海を撮りに行ったりとかしています。ゆくゆくはカメラをもって自然の撮影をしたいなと思っているのですが、車以外で行ける場所がなく、ご飯を食べに行くにしても同乗者に相談して、いつもイオンに行くことが多いです。

進行（沼田） :

ぜひ気軽にバーベキューをしたり、そこでグランピングまでしてもいいかもしれないですし、日帰りで美味しいものを食べてまた撮影して帰ってもいいし、そんな感じになればいいですね。

石川氏 :

私は響灘の工業団地の自治会もしてまして、先日区長にもお話したのですが、先ほどの食事の件で、団地には本当にコンビニが一軒しかなくて、あそこは指定地域か何かで元々あったお弁当屋さんがなくなったら、それから新しく建てられないとなっていて、いまはそれこそお弁当屋さんが来ているだけです。それと、先ほど車がないと、という話がありましたが、今後 LNG の工事などが始まると我々は渋滞が非常に恐ろしいと感じています。十数年前、プリチストンなどの時にもすごく渋滞したので、例えばシャトルバスを出してみるとか、団地の中にトラックステーションがあればと思っています。路上駐車も非常に多くて、トレーラーの頭だけ外して荷物だけ置いてあるようで、角から出たときに非常に危ない思いをしたりします。トラックステーションができれば、先ほど言われたキッチンカーも呼び込みやすくなると思いますし、団地の者としても非常に助かる意見だと思いました。

進行（沼田）：

ありがとうございます。商店街で最近飲食店の方が増えてきたという話でしたが、キッチンカーに興味がある方もいらっしゃるでしょうか。

牛島氏：

そうですね。コロナ禍で飲食が厳しいという中で、キッチンカーをやろうかなという声は上がってきてはいましたが、設備投資がかかりますので、なかなか一店舗でお金を出してやろうという風には至らなかったというのが現状です。

進行（沼田）：

もし、力をつけて、あるいは、皆さんで助け合って地元の企業のお昼ごはんの環境をよくするみたいな形になったら、夜はお酒を飲みにも本店舗まで来てくれるような、そんな循環ができればいいですね。ありがとうございます。

続いて紹介をしたいと思います。若松区の将来像について「今ある企業の力が途切れることなく続いていて、年配の方も若者、子どもも住みやすくなっている。観光地としても栄えているそんなまちになってほしい」と書いてくださった方、ぜひその思いを補足があればお願いします。

参加者 B：

若松区には古い長い歴史がある企業がたくさんあるというのを、私は若松高校に通っていますが、学校行事の一環として若松学をはじめとしたバスツアーなど、そういうものに何度か参加させていただいて知りました。そういったツアーに参加しないと知ることができないことがたくさんあるので、地元の人以外が知らないのが現状だと思います。今ある企業で働いている方々はその歴史を途絶えさせないよう、今いろんな取組をしてくださっているというのがわかったので、それを続けてこれからも若松を支えていくということと、我々学生はまだ働いていないので、学校行事を通してや SNS をうまく活用して、若者から働いている方々との連携をとっていけたらいいのかなと思います。

進行（沼田）：

ありがとうございます。観光地としても栄えるようになってほしいとありましたが、今おすすめの観光地などがあれば、今は流行っていないでもここが流行つたらいいなとかでもいいです。

参加者 B：

高塔山の夜景が有名というのもありますし、写真映えする点からしても若い人を集めやすいのかなと思いますし、高塔山でお祭りが行われたりしているので、高塔山は若い人にもしかするともっと人気が出るのではないかなと思います。

進行（沼田）：

ありがとうございました。そうでしたら次の方で 50 代の方からですが、「若松の海岸沿いが素晴らしいと思う。古くからの若松の人は海岸という『あ〜』というイメージがありますが、お洒落なカフェや雑貨屋さんなど定年後に出店したいと考えている」と書いてくださっていますが、この点についてお話しただけそうであればお願いできますでしょうか。牛島さんからもこのあとお話ししたいと思いますが。

（会場から挙手なし）

牛島氏：

ぜひご相談ください。先ほど昨日空き店舗ツアーをさせていただいたとお話をしましたが、その中でも話が出ていたのですが、お店が空いていても貸す気がない人もいます。それは不動産屋の情報には載らないです。我々は商いをしているので、大家さんの顔も知っていますし、人柄も知っていて、ちょっとお話をすれば貸してくれる可能性がある店舗もありますが、地方都市の商業地域独特のことなんでしょうけれど、本当に人脈が必要だと思っていて、私自身こちらに帰ってきて 16 年で人脈もありますし、不動産屋さんに載らない情報なども持っていますので、ぜひご相談いただけたらと思います。

進行（沼田）：

ぜひお待ちしておりますということでもよろしく願います。では、もうひとつ、行きましょう。若松区の将来像について「日本のリバプールになりましょう」ということなんです、かっこいいですね。どういった思いからこのように書いていただいたのか、20 代の方ですがお聞かせください。

参加者 C：

このアンケートが回収されるときにはまだ皆さんの高尚な議論を聞く前でしたので、私としては観光の側面に当てて考えたものでした。日本のリバプールになりたいということと、以前から聞いていて、東京をロンドンとしたら移動時間的にも北九州はちょうどリバプールにあたるということで、リバプールが置かれている状況と若松がリンクするところも多いのではないかと思います。やはり観光資源の豊富さの一方で、今議題にも上がっている、交通の不便さが解消できれば、世界的な観光都市になれるのではないかと思います、書いた次第です。

進行（沼田）：

リバプールというとイギリスの街でサッカーの強いまちだという知識くらいしかないのですが、どうしてリバプールを出したのかというのは、この辺が若松の魅力とつながる部分なのではというのがあったら教えてください。

参加者 C：

リバプールはおっしゃる通りサッカーの街でもありますし、ビートルズのリバプールかなということで、今回開演の時にジャズの演奏があったように、そういった音楽の都市ということと、スポーツに関してはギラヴァンツ北九州もありますし、やはりリンクするところが多いのではないかと思います。そういった音楽とスポーツの力というのは、観光に役立つのではないかと考えてリバプールとしました。

進行（沼田）：

なるほど。ありがとうございます。マンチェスターとリバプールの関係で、リバプールの方が港の方で、積出港となっているとか、そういう意味ではつながるところもあるということで、リバプールだそうなので、よろしく願います。

あともう一人くらい行きたいと思います。20 代未満の方から魅力のところ「一つは、若松区が取組んでいる風力発電があること。もう一つは、学生と若松区民が密接に関わり合っている」ということで、どのあたりが密接に関わり合っているのか教えてください。

参加者D：

密接に関わり合っているということは、若松高校の生徒と地域の方でインターアクト部が月1回あって、地域の方と話し合いを行っているので、そこで密接に関われていると思います。

進行（沼田）：

インターアクト部はどのようなことをされていますか。

参加者D：

インターアクト部は、若松周辺の地域活動や例えば若松駅の清掃を行ったりしています。

牛島氏：

私は若松高校の出身なのですが、我々の時代からインターアクト部はありまして、かなり歴史は長いようです。ロータリークラブと共同で色々と活動をしているようです。

進行（沼田）：

ありがとうございます。本当に様々なご意見をいただきありがとうございました。本当にすぐにできることも、時間のかかることも色々あるかと思います。ご紹介できなかった分も全て、後ほど目を通させていただき、現在作成中の新ビジョンの策定の参考にさせていただきたいと思います。アンケートの中の一つでも、二つでも実現するものができてきたらいいなと思っております。

（4）パネリストによる「〇〇なまち」発表

進行（沼田）：

それでは、今回のパネルディスカッションのまとめとして、パネリストの皆様には先ほどお話しいただいた将来像も踏まえまして、目指す都市像として「〇〇なまち」ということで改めてまとめていただきたいと思います。事前に書いておいていただくようお願いはしてはしましたが、色々な方のお話を聞いて変えたいなと思ったら変えていただいても構いません。よろしいでしょうか。それでは牛島さんから順番にお願いいたします。

牛島氏：

先ほどもっとキュッとコンパクトになればというお話もさせていただきましたので、「よりコンパクトな住み良いまち」と書かせていただきました。

進行（沼田）：

コンパクトに魅力がぐっと詰まって住みやすくなる、そのようなまちのことかなと思います。ありがとうございます。では続いて、石川さんお願いします。

石川氏：

私は、「（新しい）職人が生き続けられるまち」ということで、直前に（新しい）を追加しました。職人さんが住む、まちに人が住んでくれるという意味で、もっと大きな意味でいうと、職人というカテゴリーがなくなったら本当に困るので、職人という人達がしっかり地域にいる、それがエネルギー産業などの下支えに絶対になります。また（新しい）を追加したのは、途中の議論の中で申し上げました、趣味の関係で若松に住みたい、そんな方の雇用がここにもあるということで、今までの古い頑固で無口で腕はずごく

いというだけではなく、新しいタイプの職人が、ということで（新しい）を追加しました。

進行（沼田）：

ありがとうございます。自分で手を動かして何かを作れる、というのは本当に素晴らしいことで、ショッピングセンターやグランピング施設ができて、そこにただお金を出して消費するだけではなく、色々に関わり合ったり、手を動かしながらやっていくような施設の方が、ただの商業施設よりも豊かで面白いですし、より人も集められるのではと思います。ぜひ職人が住み続けられる、職人が職人として生きられるようなまちであってほしいということかなと思いました。ありがとうございます。続いて、大庭さんお願いします。

大庭氏：

私は、「使いやすいまち」としました。やはり限られた年代だけが使いやすくてもだめだと思いますので、全世代がこの若松区を愛して、さらにもっと魅力を発信してもっと若松区を使いやすくしていければいいのではないかと思います。

進行（沼田）：

ありがとうございます。コンパクトになるというお話と使いやすいというのはものすごくつながりやすいかなと思います。いろいろなお店がキュッとコンパクトになってそこへ行けるとなると市民の方、区民の方にとっても使いやすいまちということになっていく、ということではいろんなビジョンが繋がってくるかなと思います。それでは、藤本さんお願いします。

藤本氏：

私は「明るいまち」としました。これは人だけではなく活気などが増えていくようなという意味を含めて書きました。先ほど質問のタイミングで言おうと思ってタイミングを逃してしまったのですが、先ほど企業が SNS をという話をしましたが、企業だけではなく、工業系の職業の方々も作業の内容などを SNS にアップしていくことで、もっといろんな人が、その工場は何をしているのかがわかって、それなら自分も行きやすそうだなと思うようなことができればいいと思います。飲食店などのお店だけではなく、工場の人なども SNS をしていくことで、人も増えて結果的にこの「明るいまち」につながっていけばいいなと思っています。

進行（沼田）：

藤本さんは昔に比べてまちが明るくなったと思われる中で、さらにもっと明るくなるような未来を描いておられるということかと思います。

皆さんがおっしゃったこうなってほしいまちというのは、コンパクトであることや職人が生きられるということで、すべてつながっていくというか両立しうるもので、コンパクトで魅力が詰まってさらに明るくなって職人が生きていける、というような一つの流れにもなるような、そんなことではないかと思います。少しでもこのようなバランスに近づいていけたら、というお話だったかなと思います。

それではこれまで出た意見を踏まえまして、まず区長からまとめのコメントをお願いいたします。

奥野区長：

今日はパネリストの皆さん、そして会場の皆さん、若松に対する熱い思いを聞かせていただきまして、感謝いたします。ありがとうございました。

私も 4 月に若松区長に就任し、色々企業、飲食店なども含めてたくさん回らせていただきました。その時に改めて、問題点や色々ないいことに気付かせていただきました。今日はまた改めてこのような場で、

若松をもっともっと良くするためにということでご意見をいただきまして、私もまた非常によい機会になりました。

まず牛島さんから目指す都市像として、よりコンパクトな住み良いまち、といただきました。またご意見としては、商業地と南海岸などの観光地との連携について、そして商店街の集約化、効率的なまちの形についてお話いただきました。石川さんからは、新しい職人が生き続けられるまちということで、地元で働き続けられる面白さというものを伝えて、さらに若者が働きやすい、働き続けられるということや、職人と観光、例えばグランピングのようなものとのコラボなど、非常に面白い提案もいただきました。そして、若松高校の大庭さんからは、みんなが使いやすいまち、ということで、公共交通を補うような、レンタルサイクルのご提案もいただきました。また藤本さんからは、明るいまち、ということで、照明灯の話もありましたが、SNSの発信の在り方などもご提案いただきました。また会場の皆さんからも先ほどご紹介できなかった意見もたくさんいただいております。終わってからじっくりと見させていただきたいと思います。

いただいた夢や思いなど、皆さんのご意見を次のビジョンに生かしていきたいと思えます。ただ、実現に向けましては、行政だけでは当然できないところもあります。例えば、若松北海岸の観光地化を例にとりますと、非日常をそこで過ごされる観光客の方と、実際にそこに住んで日常生活を送られる方がいらっしゃるため、両者をうまくクロスさせるような取組みも必要になってくるかと思えます。いずれにしても、本日はいろいろな方にご参加いただきました。若松のためなら、と若松がんばろう会の会長さんも含めて、本当にたくさんの方にご参加いただき、今もお力をいただいておりますが、今後も皆さんと力を合わせて、市民と企業と学校と行政という形で、オール若松で心と力を合わせて頑張っていきたいと思えます。

進行（沼田）：

ありがとうございます。それでは結びとして市長からも本日を振り返って一言いただければと思います。よろしくをお願いします。

武内市長：

今日はパネリストの皆さん、そしてご来場の皆さん、ありがとうございました。この時間を通じて色々な気付きやきっかけづくりができたのであれば、大変うれしいなと思えます。

私は若松に来るたびにこのまちにあるものが一つでもあれば、普通のまちであればすごいことになっている、と言っています。若戸大橋もそうですし、この南海岸もそうです。古い歴史的な建造物も、ビーチもそうです。これまで全世界 200 都市ほど回ってきまして、日本も色々と回りましたが、一つの武器もなく困っているまちが多い中で、若松には本当に色々なものがあります。ただ、今日お話があったように、土地を動かしていくということ、そして交通を結んでいくということ、これによって点を線に面にしていくことが大事だと今日改めて痛感しました。

今日お話を伺っていても、物語が豊富なまちだなと思えます。石炭の積出港としての歴史も当然ありますし、モノづくりからサイクルへ移り変わり、また未来のエネルギーに変わってきて、まち自体が物語を持っています。この辺りは、売りになるというか、訴えかける力があるのではないかと私は思えます。この若松の未来像について、いわゆるまちとして標準装備のまちになっていくのか、あるいはバランスは他のまちと少し違うけれど、独自の道をいくのか、ここも考える大事なポイントだと思います。また“グリーン”が若松のポイントであるとお話を伺って思いました。若松はグリーンエネルギーもあり、グリーンエリアも非常に多いです、また野菜のグリーンもあります。そのような色がとてもはっきりと見えて来うるまちではないかと思えます。そのようなものにどんどん磨きをかけていく、ないもの探しではなく、あるものをどうやって磨いていくかが大事ではないかと改めて思いました。

最後に、今日は大庭さんと藤本さんのお二人が加わってくださってすばらしかったです。藤本さんが、ま

ちが明るくなっていると言ってくださって、勇気づけられました。若松学の企業探訪の冊子も素晴らしいです。みんなが足で歩いて作ったすばらしい冊子です。若松はこれから新しいチャレンジ、モデルチェンジの時代に入ってくると思います。今まで、ではなく新しいエネルギーであったり、あるいは観光であったり、これまでにない若松の歴史の中で新しいモデルチェンジをしなければならないタイミングに入ってきている。そこではやはりお二人のような若い力が大切ですし、オープンにならなくてははいけません。若い人や外の人、新しいアイデアや情報、色々な人をどんどん受け入れていくような包容力、若松が本来持っている包容力をどんどん発揮して、あたらしい風通しのよいまちにしていくということが、次の時代に進んでいくための大きな原動力になるのではないかと思いました。藤本さん、大庭さんはじめ、若い世代が夢を持てるような、そして前向きにチャレンジできるような若松にしていきたいと思います。今日はありがとうございました。

司会

ありがとうございました。以上をもちまして、ミライ・トーク in 若松区、第二弾のプログラムを終了とさせていただきます。たくさんの皆様に足をお運びいただきまして誠にありがとうございました。

以上